

待兼山遺跡について

大阪大学のキャンパス内には、実は多くの遺跡が眠っています。普段、大阪大学の学生や教職員、地域の方々が、何気なく歩いている地面の下には、大昔の人々が暮らした跡やお墓がみつかり、考古学の研究をする上で貴重な資料となっています。

日本では、遺跡やそこから出土した遺物は、文化財保護法という法律により、国民共有の財産として保護・活用をはかる対象とされています。しかし、地中に埋まっている遺跡は、ビルの建設や水道管の改修といった工事によって、常に破壊の危機に直面します。大阪大学では、キャンパス内の遺跡保護と建物計画などの調整を行うために、埋蔵文化財調査委員会を設置し、その委員会の指導のもとで、埋蔵文化財調査室が遺跡の調査やその活用にあたっています。

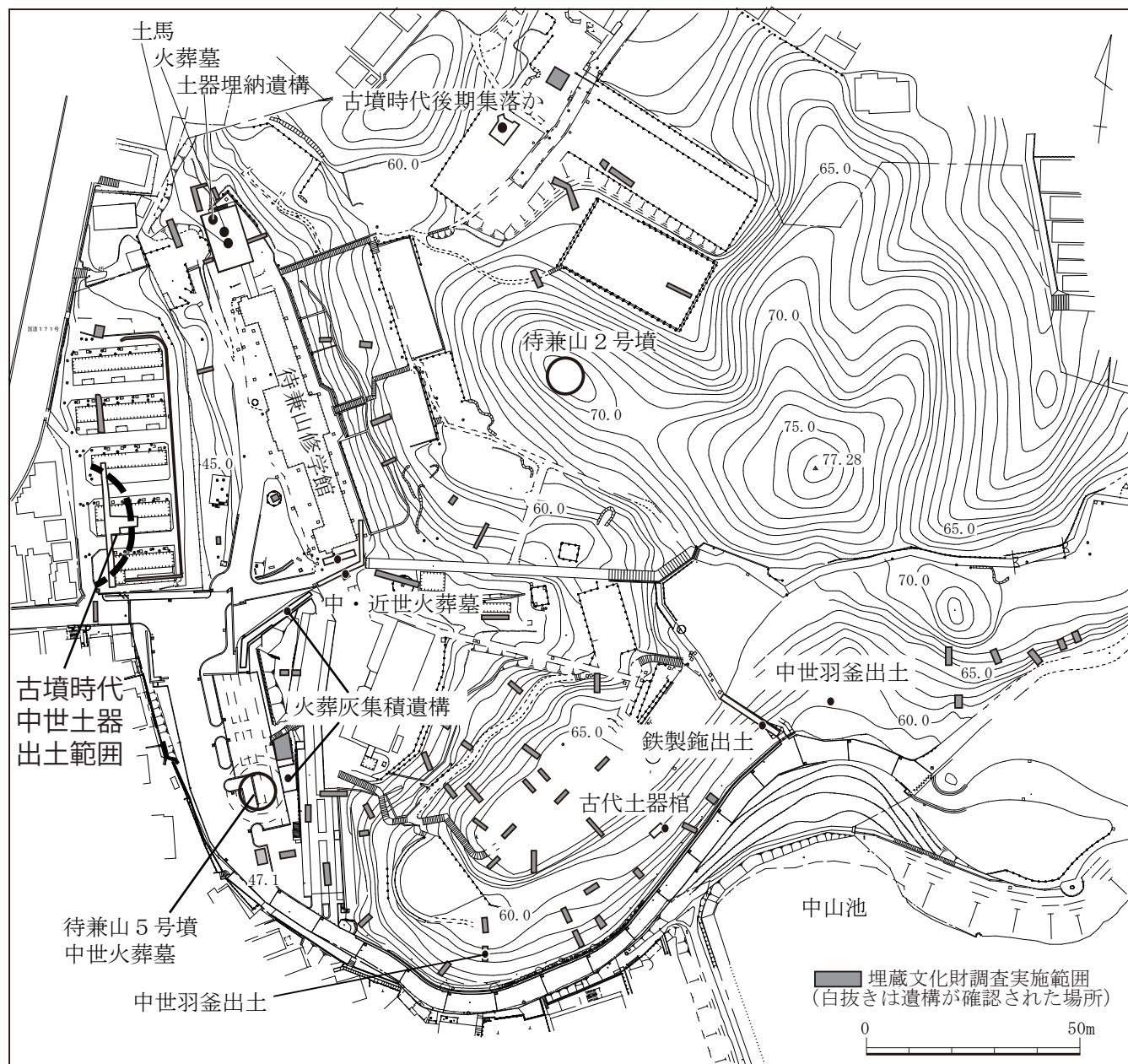
豊中キャンパスのある待兼山丘陵は、考古学者の間では戦前から考古資料の出土する地区として知られていましたが、1983年、理学部アイソトープセンター建設の際に、弥生時代の集落跡が発見され、丘陵一帯が「待兼山遺跡」として国の文化財台帳に登録されました。その後、埋蔵文化財調査室が継続的に調査を実施しています。

とくに注目すべき成果が、近年、通称「阪大坂」のある待兼山のふもとであがっています。この地区では、奈良時代の土馬と呼ばれる祭祀遺物に加え、鎌倉時代から江戸時代にかけての火葬墓地が広がっていることが新たにわかりました。

2011年の梅雨の時期に、総合学術博物館待兼山修学館の裏手で実施した発掘調査では、古代の土馬が土の中から姿をあらわしました。土馬とは、文字通り、馬を模した土人形です。現在の176号線のあたりをとっていた古代山陽道に面する場所から出土したために、おそらくは道中の安全を祈って埋められた可能性を考えることができます。この時期に用いられた須恵器とよばれる硬質の焼き物の破片も出土しています。

2013年の夏に、阪大坂下の駐輪場整備にかかわって実施した調査では、アスファルトをめくると、すぐその下に骨の小片を混じる黒い炭層が検出されました。この炭層は、2005年の発掘調査で発見された火葬墓と関連する遺構であり、火葬に伴う灰や骨、銭、土器片などをかき集めたものです。調査の結果、軟質の焼き物である土師器（はじき）の皿、陶磁器、瓦、土人形、寛永通宝等の古銭、大量の人骨片を得ることができ、こうした遺物の年代を探っていくと火葬墓の年代は、13世紀から19世紀と長期にわたることが判明しました。このような長い年月、一つの場所を墓域とする遺跡は非常に珍しく、現在、その歴史的な位置づけを研究しているところです。さらに、2014年、2015年、2016年と継続的な調査を実施し、火葬墓の範囲が確定できるようになってきました。

以上のように、待兼山のふもとでは千年を超えて人々の祈りや埋葬のあとが発見されています。この地域にとってかけがえのない場所であった待兼山遺跡は、この地の歴史を復元する上で貴重な手がかりを提供するものです。



待兼山西麓における墓域

埋蔵文化財調査室による30年来の調査によって、待兼山西麓では古墳時代以降近世末にいたるまでの墓域の様相が明らかとなってきた。上の図は、待兼山西麓における古墳、古代の土器棺、中・近世火葬墓の検出地点と主な出土遺物の出土地点を示したものである。今後の調査によって、さらなる遺跡の実態解明を目指したい。

待兼山遺跡マップ

